

みどり山防災ニュース

わがまちの防災を語ろう

じゅんばん・まちかど防災訓練 ●●

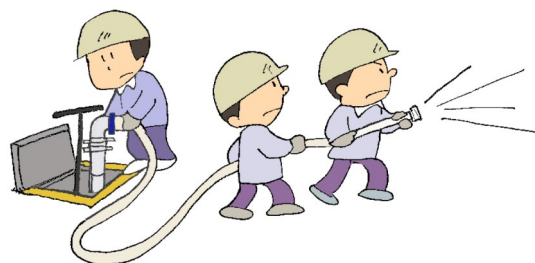
●●高めよう！地域の防災力～あなたは「もしも」に備えていますか？～

第1回目に予定された10月21日の防災訓練は1丁目4番地、20番地、21番地に住む皆さんが参加対象でした。朝からあいにくの雨模様で訓練の中心となるはずの「スタンドパイプ」放水訓練が中止となり、午前11時から自治会館で防災に関する講演が行われました。受講者は自主防災隊員も含め19名でした。

まず自主防災隊の柏木隊長から、我々の地域での大地震を想定した行政による被害予想データなどの分かりやすい解説があり、我々がとるべき行動についての講話やこれまで聞いていなかった「地震火災」「日常備蓄」の詳しい話がありました。

次に仲澤副隊長から具体的な地震対策グッズや心構えなどの講話がありました。その中で二人が最も強調されたことは、水や電気などインフラはもとより食料などが発生直後から少なくとも3日間は行政からの支援がないものと覚悟し自己責任で常日頃から備蓄を

行なうこと、そしてもう一点は、隣近所との日常のつきあいを通じて災害時に助けあえる共助の態勢を大事にするということでした。とりまおさず「じゅんばん・まちかど防災訓練」の目的はお互いの顔が判る10数戸の小グループの共同作業を通じて、災害に対する知識を深めることにあります。年内は12月2日と12月23日のあと2回が予定されているので、順番の地区の皆さんは奮ってご参加をお願いします。

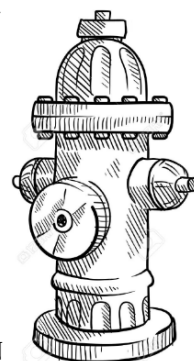


参加して感じた事・・・

「じゅんばん・まちかど防災訓練」は 台風雨の為、スタンドパイプ消火器の実施訓練こそ出来ませんでした。集会所で行われた講義、討議は大変有意義なものでした。

- ① まず、三輪緑山自主防災隊隊長より、スライドを使っての直下型地震の概要やこの地域の立地、地震被害の予想状況、地震火災の恐ろしさなどを教わりました。
 - ・町田市の飛び地にある私達の三輪地域は災害時に陸の孤島になる可能性が大きい事
 - ・よって行政に頼る前に日頃からの隣近所の共助が大切な事
 - ・平素から、ハザードマップ(消火栓の位置・スタンドパイプの置いてある場所等)の確認が重要な事
- ② 次に40年も防災の仕事をしてきた、自主防災隊の仲澤氏から普段の心得を教わりました。
 - ・自分、家族、地域を救うのは日頃からの近所力である事

- ・家の中の出来る対策は早急に行うこと
 - ・災害対策用品の準備と心構え等々
- ※ 一番残念に感じたのは雨とは言え、ほとんどの参加者が自治会役員や自主防災隊関連の皆さんで、地域住民の皆さんの参加が少なかった事でした。災害対策のプロである講師から「いつでも出前講義をしますよ!」と心強いお言葉を何度もいただきました。
- 東日本大震災から5年～あの時の防災に対する自分自身の熱もいつの間にか薄れている事を反省しながら、次はお隣の奥さん、ご近所の皆さんも誘い合わせて参加したいと考えています。ありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願ひ致します。



記:E・N

牽引用取手付の車椅子を購入しました

避難誘導班は、一般の避難の方々を対象とした「避難誘導グループ」とおひとりでは避難の困難な方を支援する「避難行動支援グループ」の2つのグループから編成されています。

避難に支援を必要とする方とは、おひとりで歩行すること、コミュニケーション(聞く、話す、読む、判断する)の困難な方々です。今年4月に行った「避難行動要支援者名簿登載」に応募され、「避難行動要支援者個別計画書」のヒアリングを受けた方々十数名が主な対象です。

この避難行動要支援者に対する避難誘導について



急な坂でも、凸凹道でも安定感のある牽引用のハンドルを装着することで、高齢者にも女性にも(押す力、引く力)人に優しい車椅子です。



●使心地感想●

「悪路での車椅子移動に不便を感じていた」という人や、「災害の時には、いち早く避難したい」なんて人にはオススメです。これまで悪路では前輪を持ち上げて移動するなんてことはした

て、従前までは災害時用リヤカーの利用を検討しておりましたが、東日本大震災後に大変便利な防災グッズ、資機材が開発、紹介されるようになりました。

今回、導入のきっかけとなった車いすアタッチメントもこのような背景から開発された装置です。

導入については、昨年より避難行動支援のための災害時用リヤカーに替わる良い搬送機材はないものかと調査、検討を重ね、昨年10月の緑山防災訓練で車いすと牽引アタッチメントの試用をし、評価いたしました。結果は、乗る側、牽く側(押す側)ともに大変好評で、導入の弾みがつき、今年度予算に計上し、4月の自治会総会、自主防災隊総会で承認を得て導入しました。

下の写真は昨年10月の防災訓練時(写真は自走用車いすを使用)のものです。

車いす単独で走行する場合は4輪ですが、牽引用のバー商品名「JINRIKI」を取り付け、移動する際は、前輪が僅かに路面から離れ、震動の少ない2輪の人力車に近い乗り心地となります。さらに牽引する搬送者の立場からは、押すより、牽く方が楽で、体力消耗の観点からも大変良いことが分かりました。なお、避難行動要支援者搬送の場合は、安全を考慮して牽引者と安全確認の押し手の2人ペアで搬送を行います。

左の写真は導入した介助用車いすに牽引アタッチメントJINRIKIを装着した状態です。



自主防災隊隊員が実際に試乗してみました。乗り心地は上々です。

事はありませんが、引っ張るといふ発想はありませんでした。言われてみれば、引っ張る方が楽なのはわかるんですけど、最初に思いつくのが凄いコロンブスの卵的な車椅子ですね。

停電中でも使用できる通信手段

みなさんは無線機を使った事がありますか？

私は家族がばらばらになりやすい公園や遊園地で、また複数の車で移動する時の連絡用に使っています。

無線機は一般の人が使うものとして3種類に分類されます。

無資格で誰でも使えるもの、届け出を行い電波の使用料を支払わなければいけないもの、資格を持っていないと使えないもの、の3種類です。この3種類の違いは、通話ができる距離です。

下の写真は、私が自宅に置いている3種類の無線機です。左から「特定小電力無線機」「デジタル簡易無線機」「アマ



チュア無線機」で上記の3種類の無線機の例です。一番左の無線機のみ単3電池で残りの無線機はバッテリーで動作します。通話できる距離はそれぞれ数百メートル、数キロメートル、数十キロメートルです。前回、災害発生時に充電に頼る器機はバッテリーが無くなってしまおう話をしてしまいました。残念な

事に無線機も性能の良いものは災害時には頼りにできません。ですが、一番左側の無線機は近距離でしか使用できませんが電池さえ備蓄していれば運用は可能です。では、この無線機でどの程度の情報を伝達できるでしょう。無線の世界では「見通し距離」という言葉があります。電波は障害物に弱く、建物などにさえぎられると、通話できる距離が短くなってしまいます。「見通し距離」とは、間に障害物が無い場合、という条件を表しています。スキー場のような場所であれば、リフト乗り場から、1キロ以上離れた山の上にいる相手と通話が可能です。この緑山で考えると、災害時に拠点となるスポーツ広場から半径1キロの円を描くと、緑山の住宅地はすっぽり入ってしまいます。つまり、緑山で起こっていること、どこで人が怪我をしている、助けを必要としている人が何丁目の何番地にいる、火災が発生しているので、消火の必要がある、などの情報は現場から直接運動広場の本部に連絡する事が可能です。

● 街中での通信距離を確保するための装置

先ほど、見通し距離という話をいたしました。電波は通話を行う無線機の間が障害物でさえぎられると通話できる距離が極端に短くなってしまいます。たとえばスポーツ広場からですと中央公園の信号を越えて建物の陰に入ってしまうと通話できなくなってしまいます。この弱点を解消するために、無線の世界ではアンテナを屋根の上などの高い位置に設置します。しかし、この手軽に使える特定小電力無線機は、アンテナを取り外して高い位置に設置することができません。その問題をカバーするのが中継器という装置です。リピーターと呼ばれています。右の写真の装置がリピーターです。この機械を障害物に邪魔されにくい高さに設置しておくことで、自分の位置から中継局まで電波が届けば、そこから先は中継局が届く範囲に電波を送り届けてくれます。

けが人が出ている、火災が発生している等の情報を通信手段が無い状態で伝えようとしたら、片道何分もかけて伝えに行かなければなりません。一刻を争う時にこの時間や労力は気の遠くなるものと感じるでしょう。たとえ数百メートルでもリアルタイムに伝える事ができる手段があることは、とても心強い事です。また、地域のミニ放送局のような使い方も考えられます。今回お伝えした事は、無線機を使った事が無い方にはあまりピンと来ない話かもしれませんが。特に今はスマートフォンという便利なものが普及しているため、子供のおもちゃ程度という認識ではないでしょうか。しかし、照明が使えない時の懐中電灯が救いの光となるように、電力が奪われた時の備えとして考えてみるアイテムの一つだと思います。

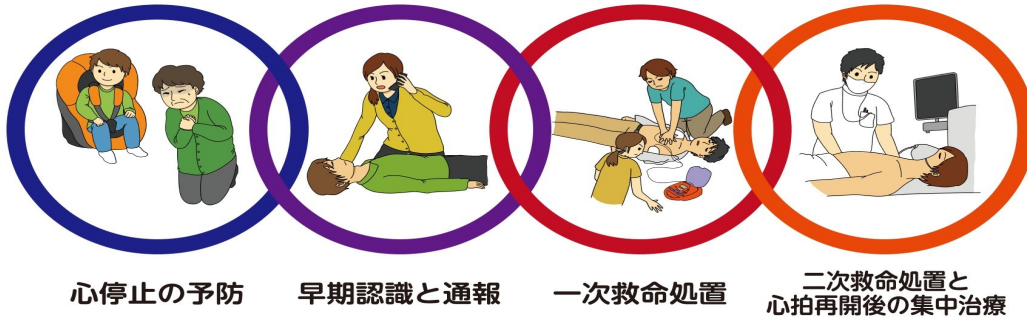


記：Y・T

緊急時の救助訓練の様子

7月22日(日)に救出・救護班は集会所で救助訓練を行いました。倒壊家屋の下敷きになった人を想定して、バー、パンタジャッキ、クサビ等を用いて救出しました。訓練で使用した角材は元救出・救護班の方の自宅を建替える際の廃材(4寸の角材2.7mを6本ほど)を分けてい

ただきました。
この内の1本からクサビ×4、角ブロック×4の救助用具を自作し、ダミー人形は町田消防署鶴川出張所から借用しました。
訓練作業は、昨年9月の池袋防災館の救出訓練とYouTubeを参考に実施しました。



鯀絵が現代に語るもの

現在400枚ほど保存が確認されている鯀絵の多くは安政2年に発生した大地震の自然の圧倒的な力や、災害の悲惨さを感じさせない。あわてて江戸に駆けつける鹿島大明神にしろ、軽口を叩いて金持ちを懲らしめる地震鯀にしろ、江戸の庶民言葉をしゃべり、庶民と等身大に描かれている。また、災害に対し、被害者の立場にとどまらず、多様な観点から、複合的で柔軟な笑いを提供してる。鯀絵は、目に見えない災害という巨大な力を滑稽な鯀に擬人化して社会に取り組み、その鯀を中心にしてさまざまな人々の視点から災害後の社会を茶化している。人々はその笑いを共有することで、自らに降りかかった災害という避けがたい受難に、柔軟に対処することができたのではないだろうか。社会が被った物的な、また人的な損害に被害者側の視点からシビアな対応が求められる現代の状況からしてみると、鯀絵に描かれた風刺は、いささか不遜で不謹慎な態度と見えるかもしれない笑いが働きかける



のは人間の心である。物的な被害に対処する一方で、現代の災害ではPTSD(心的外傷後ストレス障害)といった被害者が受けた心の傷の問題への取り組みがクローズアップされている。現代では奇異にも見える鯀絵のユーモア

が、我々と設定を持つとすれば、こうした心の側面であるだろう。

災害が持つ負のイメージを強調すればする程、実際にその災害で被害を被った被災者の心の傷も、深くなるのではないだろうか。悲惨な災害に対し正面から取り組む必要性を軽んじるものではないが、災害に対する一面的で過剰な反応は、一方でまた別の負債を生みかねない。多様なユーモアを複合

した鯀絵が現代に伝えるのは、頑(かたく)くなになりがちな災害に対する反応を、笑いによって解きほぐし、災害が持つ負のイメージを緩和する微妙な心のケアであるように思われてならない。